Press, Cambridge.　Yoroi, R. 1972. Sci. Rep. Tokyo Kyoiku Daigaku, Sect. B. 15: 81-110.

*　　*　　*　　*

カラクサシダ（*Pleurosoriopsis makinoi*）の配偶体の培養と観察を行ない次の知見を得た。

胞子は両面体。早くから葉緑体をもち胞子のう内で壁内発芽をする。第一回の分裂で胞子は背腹軸に平行な膜によって二等分される。初生仮根は 4〜6 細胞期に形成される。発達した配偶体はハート形にならず，不定形。しばしば分岐する。造精器，造卵器，毛，無性芽が形成される。造精器，造卵器はいずれも薄のうシダ類に一般的な型。毛は多細胞分岐毛で，先端部の 1〜2 細胞と枝細胞には葉緑体が見られない。無性芽は平板で，長楕円形。

これらの形質のうち，多細胞分岐毛はウラボシ科に見られるものと強い類似性を示し，カラクサシダとウラボシ科の類縁性を示唆しているように思われる。他の特徴的な形質，胞子の発芽様式，配偶体の全形，無性芽からはカラクサシダと他群との類縁性を推定することは困難である。

□Foster, A.S. & Gifford, E.M.: **Comparative Morphology of Vascular Plants,** 2nd edition. 751 pp. 1974. Freeman and Company. $17. 本書は 1959 年に出版され比較形態学の教科書として好評だった初版の改訂版で，全体にわたってかなり大幅な内容の変更が行われている。比較的簡単に扱われていた被子植物では花粉・胚発生等の記述も充実し，初版では言及されなかった花序等についてもかなり詳しい説明が加わった。記述は従来通り全分類群に首尾一貫した方針が採られ，全体としてよくバランスがとれている。ただし最近進化，系統に関係して多くの問題提起のあった Cycadeoidea や古生マツバラン類は幾分簡単に扱われているように思われる。後者については，Banks に従って Rhyniopsida, Zosterophyllopsida, Trimerophytopsida という独立の綱に分ける思い切った扱いをしている。反面一連の Rhynie 植物研究から Lemoigne が 1968 年に発表した Banks 説と対照的な分類には一言もふれていない。また増加の著しいデヴォン紀以前の維管束植物化石の吟味もおざなりである等多少の物足りなさを覚えるところもある。（大場秀章）